縄文時代における貝製装身具の実際

忍　澤　成　視

1．はじめに

縄文時代の貝塚からは数多くの貝製品が出土するが、この中にはある研究者が新種貝製品として報告し注意を促したために認識され、その後急速に各地で発見されるようになったものも多い。たとえば、二枚貝の腹縁部を加工した「貝刃」は1954年、西村正衛・金子浩昌氏により千葉県白井雷貝塚の報告において呼称・注意され[1]て以来東京湾や仙台湾周辺の諸貝塚から続々と発見され、今日では貝塚から最も多く出土する貝製品の一つとして認識されている。また1985年、宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚の報告では、ハマグリの殻頂部あるいは腹縁から背縁に擦痕の認められる「スレ貝殻」がはじめて発見され、遺物の分析と使用実験から土器の器面のケズリやミガキ調整に使用されたものと推定されている[2]。その後、里浜貝塚以外の遺跡から同様の製品が出土したという報告はあまり聞かなかったが、1998年千葉県千葉市有吉北貝塚の報告では、アリソガイ・大型ハマグリの腹縁部が使用の結果磨り減った「磨貝」が発見された[3]。里浜貝塚の「スレ貝殻」とは使用痕の状態が異なるものの、何らかの加工具として注目されている。特にこれらの製品は、自然の貝殻をそのまま使用し、その結果貝殻本来の形態に変形をきたしたものであるため、製品の存在を認識していない限りは発見することは難しいと思われる。発見者の注意力の賜と言えよう。

貝製品の素材は、貝塚の貝層を構成する主体である貝殻そのものであるから、その中に含まれてしまうと、骨角製品や魚骨・獣骨などの骨類以上に検出が困難であり、その製品の存在を認識したうえで見つけ出そうという意識なくしてはまずそのほとんどが世に出ることはない。そこで、本論では貝製品のなかで装身具類に注目し、これまで筆者が関わってきた貝塚調査や今日までに報告された各地の貝塚調査での検出例をまとめ、製品の特徴を整理し、今後の類品増加のための一助としたい。

2．貝塚の詳細調査と貝製品の発見事例

1970年代の終わりから1980年代、貝塚のもつ情報量の豊富さが声高に叫ばれるようになって以来、貝塚調査はより詳細なものへと移行し、その過程で貝塚にある貝層の全てをサンプルとして土ごと遺跡から持ち帰ることも当然のように行われるようになってきた。遺跡から持ち帰られた貝層サンプルは、フルイを用いて水洗され、その後微細遺物の抽出・分類・同定・集計がおこなわれる。使用されるフルイ目は、最小１㎜程度、場合によってはそれ以下のものが用いられることもある。その結果、特に動物遺存体に関する分析は、従来検出しえなかった種類・

サイズのものまでが対象となり、縄文時代の生業活動の実態解明のためには、これらの精緻な作業は不可欠なものとなってきている。微細なフルイを用いた貝層サンプルの水洗・選別作業は、動物遺存体の抽出ばかりではなく、微細な人工遺物(特に、小型の剥片石器や玉類や骨角貝製品)の発見にも寄与していると言える。これらは通常の遺跡の発掘調査方法では決して回収できなかったものである。とくに貝製品については、微細な製品はもちろん、これまであまり検出例がなかったり全く知られていなかった製品も発見されるようになってきた。貝類を分析する過程で、抽出されたり認識される機会ができたことによるものとみられる。

①対象とする遺跡

詳細に貝層の内容物が分析された貝塚調査の増加と分析データの蓄積により、これまであまり詳しく知ることができなかった縄文時代の貝製装身具の内容がかなり明らかとなってきている。第1表は、筆者がこれまで発掘・整理報告作業に関わった関東地方の7カ所の貝塚と、詳細に貝層などの内容物が分析された17カ所、計24カ所の全国各地の遺跡から検出された貝製品の種類と数を一覧にしたものである。今回扱う遺跡は次のとおりである。

・東京都荒川区日暮里延命院貝塚、埼玉県伊奈町大針貝塚、千葉県市原市亥の海道貝塚、市原市能満上小貝塚、市原市祇園原貝塚、市原市西広貝塚、神奈川県横浜市茅ヶ崎貝塚

・北海道コタン温泉遺跡、北海道戸井貝塚、宮城県中沢目貝塚、宮城県里浜貝塚、宮城県田柄貝塚、福島県薄磯貝塚、茨城県上高津貝塚、茨城県中妻貝塚、茨城県原町西貝塚、東京都居木橋遺跡、埼玉県妙音寺洞穴、千葉県有吉北貝塚、千葉県庚塚遺跡、千葉県東新山遺跡、愛知県伊川津貝塚、滋賀県粟津湖底遺跡、鹿児島県武貝塚

地域別では、北海道2・東北4・関東15・東海1・近畿1・九州1遺跡である。時期別では、早～前期1・前期7・中期1・後期9・後～晩期2・晩期4遺跡である。

②貝層・土壌サンプルの分析方法

遺跡における貝製装身具のありかたを分析する際、貝塚の貝層サンプルおよび遺跡の土壌サンプルの分析処理方法が最も問題となる。なぜなら、フルイを用いた水洗・選別方法をとらなければ発見できない貝製品が数多くあるからである。ここでは、調査対象となった貝層や土壌の全てを持ち帰り一定の基準で分析処理されたものを「皆采サンプル処理」と呼び、調査対象となった貝層や土壌の一部を持ち帰り一定の基準で分析処理されたものを「コラムサンプル処理」と呼ぶ。今回分析対象とする遺跡のうち、皆采サンプル処理をおこなった遺跡は19カ所、コラムサンプル処理をおこなった遺跡は5カ所である。備考欄には、検出された貝製品のうち水洗選別の過程で発見されたものがどの程度あるのか、報告書中に示されているものを記した。貝製品のうちのかなりのものが水洗選別の過程で発見されていることがわかる。

3．貝製装身具の種類と特徴

貝輪　（第１・２図）

二枚貝もしくは巻貝の中央部をくりぬき、環状の製品に加工したものである。貝製装身具のなかでは最も出土頻度が高い。利用された貝種としては、サルボウガイ（１）・サトウガイ・アカガイ（２）・ベンケイガイ（３）・タマキガイ・イタボガキ（４・５）・オオツタノハガイ（６～11）・アカニシ(12) などがあり、地域や時期により貝種の構成に相違が認められる場合がある。貝輪の素材となった貝種は、通常食料として採取していたものを利用する場合も全くなかったとは言えないが、生息環境や貝輪に適した大きさを考えると、多くは貝輪用に選択され集落内に持ち込まれたものと考えられる。したがってこれらの貝種については、貝層中などから検出された場合、残存状況にかかわらず食用に供されたものとしての自然遺物とは別に扱う必要があろう。貝輪素材として集落にもちこまれたが加工されなかったもの、あるいは未製品が含まれている可能性がある。

貝輪素材となった貝種のうち、オオツタノハガイは、入手ルートが明確にされていないという点において特に注意が必要である[4]。その他の貝種についても、遺跡ごとに入手先について検討する必要があろう。生貝で採取されたのか、死殻を打ち上げ状態で採取したものかも考慮する必要がある。

小型貝輪（環状品）　第３図－13～17

二枚貝もしくは巻貝の中央部をくりぬき、環状の製品に加工したものであるが、貝輪と比べずっと小さい。概ね指輪程度の大きさである。利用された貝種としては、 カサガイ類が多く、ユキノカサガイ(14・15)・ベッコウカサガイ・ヒメコザラガイ(17)・ウノアシ(16)・レイシなどがみられる。北海道・東北地方に類例があるが、関東以西ではあまりみつかっていない。人為的ではなく自然的な要因で貝殻の中央に穴があいている個体も多々みられるが、その都度割れ口をよく観察し、製品の検出に努める必要がある。また、これらの貝種には岩礁域に生息するものが多く、内湾の水域にはあまりみられない。内湾性の貝塚の場合、加工の有無に関わらず、これらの貝種を検出できれば食用に供されたものとしての自然遺物とは別に扱う必要があろう。なお、17は市原市亥の海道貝塚出土のものであり、報告段階ではヨメガカサの幼貝として扱っていたが、後にヒメコザラガイと同定した。

管状垂飾　（第３図－18～28）

ツノガイ類を適当な長さに切断して製品化したもの、あるいはそのまま利用したものもあったとみられる。自然の貝殻の形態をほとんどそのままの状態で管状の垂飾にできる点において最も適した素材であったと推定される。利用された貝種としては、ヤカドツノガイ(18・20・

23・25・27)・ツノガイ(19・21・24・26・28)・マルツノガイ(22) がみられる。この種の製品については、これまであまり注目されたことがなく、検出されても自然遺物として扱われる場合も少なくない[5]。しかし、最近の貝塚調査では検出される点数も飛躍的に増加しており、おそらく貝製装身具において数の上では貝輪に匹敵するかあるいはこれを越える存在であったとみられる。複数の個体を連結して使用していたものとみられる。

利用される素材であるツノガイ類は、一般的に深海に棲む貝類として知られている。貝類図鑑などによれば、ヤカドツノガイは5～100m・ツノガイは15～550m・マルツノガイは20～1000mの海底に生息するという。したがって、当時生貝を採取できた可能性はなく、台風の後や冬季に海が荒れた後、ヤカドツノガイであれば海岸に打ち上がったものを採集することは可能であったとみられるが、ツノガイ・マルツノガイはまず不可能であろう。ところが遺跡からの出土例をみると、ヤカドツノガイよりもむしろツノガイのほうが多い場合もあり、入手ルートの検討が必要となる。海岸部ではなく、陸上の化石層の露頭などからの素材採取も考慮する必要があろう[6]。いずれにせよツノガイ類は、管状垂飾の素材とする目的で集落内に持ち込まれたものと考えられるので、明確な切断加工の有無にかかわらず食用に供されたものとしての自然遺物とは別に扱い、装身具として利用されたものとみなすべきであろう。

二枚貝穿孔品　(第3図－29～34)

二枚貝の殻頂部に小孔をあけたものであり、貝種としてはハマグリ(29・34)・チョウセンハマグリ(32)・タマキガイ(30)・エゾタマキガイ(33)・ベンケイガイ・ハイガイ(31)・イソシジミなどがみられるが、今回扱った遺跡では、東北地方の3カ所・九州地方1カ所の貝塚に類例がある。また、これらの遺跡以外でもこの他に数種の二枚貝の使用例がある。使用された貝種は、遺跡の立地する付近の海域ではみられないものが多く、このことからあえて選択されたものとみられる。貝殻には、ツメタガイなどが捕獲・食肉の目的であけた孔の跡が残るものが少なからずみられる。穿孔された位置や、孔のあけ方など資料をよく観察し、人為的な加工か否かの区別をしなければならない。また、各地域の貝塚の貝層を構成する主体貝種以外の二枚貝には特に注意が必要であり、その貝の生息環境を調べたうえで、食用以外の目的で付近の海域とは別の場所から搬入された可能性も念頭におくべきであろう。まだ知られていない貝種の穿孔品や貝輪がみつかる可能性もある。

巻貝穿孔品　(第4図－35～41)

巻貝の殻長部に小孔をあけたものであり、貝種としてはアマオブネガイ(35～37)・ヒロクチカノコガイ (38・39)・マクラガイ (40・41) などがみられる。九州地方の遺跡で人骨の副葬品として発見されたものが数例知られているが、その他の地方では類例はまだ少ない。今回扱う

遺跡例ではアマオブネガイ・ヒロクチカノコガイ・マクラガイの3種のみであるが、この他の遺跡で穿孔品に使用された巻貝は他に数種ある。今後、この他にもまだ知られていない貝種の穿孔品がみつかる可能性もある。各地域の貝塚の貝層を構成する主体貝種以外の巻貝には特に注意が必要であり、その貝の生息環境を調べたうえで、食用以外の目的で搬入された可能性を念頭におくべきであろう。

アマオブネガイ・ヒロクチカノコガイの穿孔品を2点ずつ出土した市原市祇園原貝塚の貝層の主体貝種は、内湾砂泥底に棲むものである。アマオブネガイは岩礁性の貝類で、岩場に張り付いて生息している。千葉県内では南房総の内房域から外房域まで広く分布しており、岩場で生貝の採取も可能であるが、こういった海域の海岸部では死殻の打ち上げ個体を採取することも可能である。殻長2㎝ほどの大きさで白と黒の斑模様が特徴的である。これに対しヒロクチカノコガイは、形態的にはアマオブネガイに似るが殻長1㎝ほどとやや小振りで、濃い灰色を基調とする細かい模様があり、厚い表皮に覆われているため貝塚産の資料にも模様が残存する場合が多い。生息場所は汽水域であり干潟にある石の上などに付いているが、現在の生息地は貝類図鑑によれば紀伊半島以南に分布するという。祇園原貝塚の形成当時、周辺の水域で本種が採取できたか否かは明かではないが、東日本の貝塚で未加工のものもみかけることはあまりない。縄文中期の千葉市有吉北貝塚からは、1点のヒロクチカノコガイが出土しているが、報告書刊行後、殻頂部に穿孔がある製品であることが確認できた[7]。

両種とも本来何かに張り付いて生息するため殻口部は平らで、殻頂部にあけた孔から殻口部に紐を通せば、腕や足首にほどよくフィットする。穿孔品というと垂飾すなわち首飾りを推定しがちであるが、腕飾りや足飾りとしての装着法も考えられよう。福岡県山鹿貝塚の17号女性人骨の左肘・右足首からは18点のヒロクチカノコガイ製品が発見され、熊本県轟貝塚からは女性人骨の頸後部から7点のアマオブネガイ製品が発見されている[8]。いずれにせよ複数を連ねて使用していたとみられる。

巻貝殻頂部加工品　(第4図－42～56)

巻貝の殻頂部を横方向に切断し、さらに中央部に穿孔したりするものである。なかには加工が非常に入念におこなわれ、頂部の中心部のみを使用した非常に小型のボタン状の製品もあり(48)、貝種の推定が困難なものもあるが、多くはイモガイ類を使用しているものとみられる。貝種が判明しているものではこの他にマガキガイ(53) などがみられる。製品には、外面は平滑であるが内面に特徴的な渦巻き紋様が認められる。製品化されたイモガイ類の形態や大きさからみる限り、数種類の貝種が使われている可能性がある。ただしイモガイ類の場合、殻頂部の形態や大きさだけでは種の同定が困難であり、しかも貝塚産の資料は殻表面にも加工が及んでいる場合が多くさらに同定を難しくしている。したがって、稀に検出される未加工のイモガ

イから検討し、製品に利用された貝種の推定をすすめたい。未加工イモガイ類の出土例はあまり多くないが、最近の貝塚調査でみつかるようになってきている(千葉市有吉北貝塚では種未記載であるがサヤガタイモガイと思われるもの1点(55)・市原市武士遺跡ではベッコウイモガイ1点(56)[9]市原市祇園原貝塚では報告後同定できたものでサヤガタイモガイ1点・オカモトイモガイ1点が確認されている)。

イモガイ類はいわゆる「南海産の貝類」の一つであり、沖縄・奄美地方から紀伊半島、関東地方では黒潮の影響を受ける三浦半島や房総半島・伊豆諸島に生息する。ただし、生息する貝種の種類や数の構成については一様ではなく、地域ごとにかなり相違が認められる。これらの現在の実態を把握した上で、貝塚産の貝製品の素材の種を同定し入手先について検討する必要がある。入手方法は、おそらくこういった海域の海岸部で死殻の打ち上げ個体を採取したものとみられる。筆者が行っている一部の地域の海岸部での死殻の打ち上げ個体の実態調査では、イモガイ類の種と数の構成が明らかにできるとともに、自然の要因で殻頂部が切断され中央部に穿孔がみられる貝塚から出土するのと同形態の個体が数多く打ち上がっていることを確認している[10]。こういった個体は、波に長時間洗われているため、表面が水磨を受けて極めて平滑であり、殻表面に虫食い状の痕跡が認められるものもある。遺跡出土のイモガイ製品にも、水磨や虫食い痕跡の認められるものもあり(42・50・53)、従来から考えられているように、遺跡から出土する全ての製品が完形貝を入手し殻頂部を切断、中央部穿孔がおこなわれたとすべきではない。自然の営力による製品がそのままのかたちで利用された場合もありうることを念頭におく必要があろう。そういう面での資料の入念な観察が今後求められる。

貝製平玉　(第4図－57～61)

二枚貝を素材とし、その一部を切断加工し中央に穿孔したものである。素材としては ビノスガイ(57・58)・マガキ(60)・ベンケイガイ(59) があり、今回の分析対象では北海道と東北地方の貝塚に類例がある。特に北海道では、人骨の副葬品として貝製の平玉が多量に検出される事例があり[11]注目される。貝製平玉の場合、貝殻素材の原形の特徴よりも加工後の形態に主眼が置かれている可能性があり、加工はかなり入念であって素材の特徴が残りにくい。完形に近いものや穿孔部が残っていないと製品として認めにくいが、調査者の意識と注意によってはあまり類例がない関東地方以西でも今後みつかる可能性がある。

巻貝殻口部加工品　(第5図)

巻貝の殻口部を切断したものである。使用される素材としては、タカラガイ類(62～78)・カズラガイ(82・83)・トウカムリガイ科(カズラガイ・ウラシマガイなど)(79)・ヤツシロガイ(80・81)・カコボラ(84) などがあるが、主体はタカラガイ類であり、一般にはタカラガイ加

工品として古くより認知されている[12]。これ以外の貝種は、代用品とみられる。貝殻の腹面の外唇部と内唇部の両方を残し、背面を除去するいわゆる1/2タイプと、背面を除去し外唇部と内唇部のいずれか一方のみにするいわゆる1/4タイプとがある。遺跡出土例からすると前者はあまり多くなく、後者のうちでも独特な形態をもつ外唇部を残すものが主体であったとみられる。これらのタカラガイ加工品は、貝殻の部分的な切断以外は稀に穿孔やアスファルト(62・64)・赤色顔料の付着が認められる他は加工の跡が認められない。筆者は以前、市原市西広貝塚605号住居(堀之内1期)の埋設土器内幼児埋葬に伴う例をあげ(第7図)、単なる装身具ではなく護符的な用途に使われた可能性を指摘した[13]。その後、明確な出土状況を示す製品の検出例は得られなかったが、かつて発掘調査され最近報告された市川市向台貝塚(中期)に、5号男性人骨の胸部付近から出土した未加工のコモンダカラガイがあることがわかった[14]。製品ではないものの副葬例として貴重である。なお、西広貝塚例はその後の実査によりキイロダカラガイの外唇部と判明した。

製品の用途解明にはさらに明確な出土例の蓄積が必要であるが、この製品の示すもう一つの意義としてイモガイ類とともに貝素材の入手先の解明があげられる。タカラガイ類は、前述したイモガイ類と並ぶいわゆる「南海産の貝類」の一つであるが、日本では黒潮の影響を受ける海域に広く分布し、沖縄・奄美地方から紀伊半島、関東地方では三浦半島や房総半島・伊豆諸島さらに日本海側にも生息する。ただし、生息する貝種の種類や数の構成については一様ではなく、地域ごとにかなり相違が認められる。これらの現在の実態を把握した上で、貝塚産の貝製品の素材の種を同定し入手先について検討する必要がある。タカラガイの分布域を南海産の貝というイメージだけから沖縄や奄美地方と結びつけてしまうのはいかにも早急であり[15]、この貝類の生態や生息域についての理解がまず必要であろう。入手方法は、おそらくこういった海域の海岸部で死殻の打ち上げ個体を採取したものとみられる。筆者は、現在の海岸部での死殻の打ち上げ個体の実態調査により、一部の海域の海岸部でのタカラガイ類の種類と数の構成の相違を明らかにしつつある[16]。またこの調査では、イモガイ類の場合と同様に、自然の要因で殻の背面部が切断されたり、さらに外唇部と内唇部のいずれか一方のみになった貝塚から出土するのと同形態の個体が少なからず打ち上がっていることを確認している。こういった個体は、波に長時間洗われているため、表面が水磨を受けて極めて平滑であり、殻表面に虫食い状の痕跡が認められるものもある。従来から考えられているように、遺跡出土のタカラガイ類加工品の全てを、完形貝を入手し殻の背面部を切断、さらに外唇部と内唇部の2つに分断したものとすべきではない。自然の営力による製品をそのままのかたちで利用する場合もあった可能性も考えるべきであろう。そういう面での資料の入念な観察が、イモガイ類の加工品と同様今後求められるだろう。

タカラガイ類は、完形の場合は背面の色や紋様が種の同定のためのポイントの一つとなるが、

貝塚産の加工品の場合多くはこの部分が失われているので利用できない。しかし、タカラガイ類の場合は、この他にも個体の殻長の大きさ・全体の形態・腹面の内唇・外唇部の形状が種ごとに異なるため同定に利用できる。余程残存状況が悪いか、断片的な資料でない限りはかなりのところまで種の推定はできるとみている。さらに稀に出土する未加工のタカラガイ類では、保存状況が良ければ紋様や色彩の一部が残存するものもあり、ほとんどの場合は種の同定は可能であるとみられる。ただし、タカラガイ類は幼貝から成貝に移行する段階に未成貝という状態があり、内唇・外唇部の形状が成貝とはかなり異なっている。さらに成貝になってからも成長過程で多少の個体差があるので、遺跡出土のものを同定するには、同一種であっても可能な限り現生標本を多く集めることが不可欠である。

なお、今回図示した製品は、報告書の実測図や写真、実査により全て種同定が可能となっている。62がハナマルユキダカラガイ？、63～65・68・69がホシキヌタガイ、66がコモンダカラガイ、67がキイロダカラガイ、70～72・75・78がメダカラガイ、73がイボダカラガイ、74がハチジョウダカラガイ、76がカモンダカラガイ、77がナシジダカラガイ、そして83の延命院貝塚の資料は、報告段階ではタカラガイとして扱ったが、実査の結果カズラガイと判明した。

赤彩貝　(第6図－85～89)

二枚貝の内・外面の一方もしくは両面に赤色顔料の付着が認められるもので、貝殻自体にはとくに加工の跡はない。全国的に資料を集成した結果、使用される貝種にはハマグリ(85)・シオフキガイ(87)・オオノガイ(86・89)・バカガイ・マガキ・チョウセンハマグリ・ミルクイ・アリソガイ・アワビ類・ムラサキガイ(88)・シジミなどがあり、特定の貝種を選択していることはなさそうである。しかし、市原市祇園原貝塚では出土した8例中6例までがオオノガイを使用しており、また市内手永貝塚[16]では出土した2点ともにオオノガイを使い、市内武士遺跡の1例もオオノガイというようにある地域に多く使われる貝種が存在した可能性もあるので、もう少し各地の資料の増加を待って検討したい。用途について筆者は以前、市原市西広貝塚605号住居(堀之内1期)の床面付近から多量に出土した赤彩貝の出土状況(第7図)と各資料の赤色顔料付着状況を観察し、赤彩が貝殻の内外両面に認められることから、これらの遺物が従来から言われている赤色顔料を容れるためのパレット状の容器ではなく、同一住居奥壁付近から発見された埋設土器内幼児埋葬とこれに伴うタカラガイ加工品の出土状況を含め、葬送儀礼に関係する道具である可能性を指摘した[13]。また、この段階では明らかでなかったが、同じ住居の炉址付近の床面上より雄のイノシシの頭蓋骨がほぼ完全なかたちで出土していることもこの場で付け加えておきたい。

赤彩貝は、貝自体には特に加工が及ばないため自然遺物との区別が難しく、また赤彩自体もフルイ上水洗・選別の段階で失われる可能性が高い。したがって、こういった遺物の存在と特

徴を認識したうえでの水洗・選別作業が不可欠であり、1点でも検出できたら特にその箇所のサンプルは注意すべきである。まとまって埋存している可能性もあるからである。また赤彩貝については、今後各地で貝層サンプル中からの検出事例を増やすことも望まれるが、明確な出土状況を示す事例が発掘調査の段階で明らかになることが用途解明に直接つながると思われるので、貝塚の発掘調査段階で細心の注意をはらって資料検出に努めたい。なお、赤色顔料自体の分析も今後の課題である。ちなみに西広貝塚の赤彩貝の赤色顔料の一部を分析した結果、ベンガラと水銀朱の両方が確認されている。

碁石形貝製品　(第6図－91)

チョウセンハマグリの殻の最も厚い部分を使い、円形に近い形に整形したものである。愛知県伊川津貝塚で人骨付近から出土したことから、かつて埋葬との関係が指摘された遺物である[17]。その後の同貝塚の発掘調査でも貝層のコラムサンプル中から、殻を打ち割り一部に研磨が加えられ整形された類品が出土している。しかし、全面を研磨したいわゆる「碁石」状の形態ではないので、検出にはかなりの注意力と遺物に対する認識が必要である。ただし、素材として殻の厚いチョウセンハマグリを利用していることから、他の貝との区別は可能と思われる。

その他の貝製品　(第6図－90・92)

上記以外の貝製品として、宮城県中沢目貝塚から6点出土しているヌマガイの加工品をあげておきたい(90)。真珠光沢をもつ部分を使い穿孔・彫刻的刻みを施したもので、貝を素材にこのような加工をするものはあまり類例がないが、東京都西ケ原貝塚にカワシンジュガイ(92)を利用した製品がある[18]。いずれも一部の貝のもつ真珠光沢面を装身具として利用している事例であり、アワビ類などを使った製品も今後発見される可能性がある。

4．貝製装身具の組成にみられる地域差と時期差　(第2表)

貝塚の貝層内容物の詳細な分析が各地でおこなわれるようになった結果、かなり多くの貝製装身具が検出されるようになったものの、これらの内容はまだ不充分で組成にみられる地域差や時期差が述べられる段階にはない。貝輪やツノガイを使った管状垂飾が時期を越え、地域を越えて広く分布するように、いずれは今回扱った多くの貝製品に同じような状況がみられるようになるのではないだろうか。おそらく貝製の装身具を身につけることは、縄文時代において古くより広くおこなわれていた行為であり、その結果多様性に富んだ貝種が選択されるようになったと思われる。各地の資料がかなり蓄積された段階でもなお検出される時期や地域に偏りのみられる製品こそ、特殊な扱いを受けたものということになるだろう。

5．まとめにかえて・貝塚の調査法と貝製装身具の検出

北海道・東北・関東・東海・近畿・九州地方の遺跡から貝層などの詳細な分析がおこなわれた遺跡を24カ所選び、そこから検出された貝製品の内容を分析した。遺跡から貝層や土壌の一部もしくは全てがサンプルとして持ち帰られ、内容物の分析が詳細におこなわれるようになったことにより、貝製装身具の検出される頻度はかなり増大し、これまで知られていなかった製品も見つかるようになってきている。しかし、これらを検出するためには貝層・土壌サンプル調査法の確立と貝製品に対する調査者の認識と理解が不可欠である。

とくに、貝塚は情報量が膨大で、非常に貴重な存在であることは誰もが認識してはいるが、この調査・分析には膨大な時間と労力、さらにサンプルの保管・整理場所を要する。このため、貝層の全てを同じように詳細に分析できないことから、コラムサンプルと称して貝塚の一部だけを詳細に分析する調査法もとられている。確かに、貝類や微細な魚骨のように元々数が多いものについてはこの方法でもある程度一部分から全体を復元することも可能かもしれない。しかし、元々数があまり多くない獣骨・微細な人工遺物や貝製品などはどうであろうか。貝層の一部のコラムサンプルだけではとても全体を復元しきれないだろう。貝塚の調査をするからには、その全てをある程度のフルイにかけ遺物を回収する必要がある。通常多くの貝塚では10・4・1㎜の3段階のフルイを使い、貝層内容物の水洗・選別が行われることが多い。このうち、最も分析に時間と労力を要するのは最小1㎜程度のフルイ上残留物の選別・同定・集計作業である。微細な魚骨・微小貝などが多量に含まれる場合が多いからである。ここまでの分析を全ての貝層についておこなうことは理想ではあるが、現実問題として不可能である。したがって、発掘調査・整理・報告に入る時点で調査方針と最小フルイ目まで詳細分析をおこなえる量を決定する。そして、報告段階で全体量に対し何％を詳細分析したかを明示すれば、抽出された各内容物量から全てを分析した場合の検出量がある程度復元可能とみられる。一方、詳細分析をおこなう以外の部分については4㎜程度のフルイを用いて水洗し、残留物中から発掘調査時点では回収できなかった人工遺物や比較的大型の動物遺存体などを抽出する。これ以外は完形の貝類とその破片であり、各貝塚の主体構成貝種以外の貝類については食用以外の目的で他所より搬入された可能性があるためできる限り抽出するが、主体構成貝種については基本的に廃棄する。したがって、調査者はこの時点で特に貝製品の抽出に最大限に努力する。なお、このフルイを通過するサイズの遺物および貝塚の主体構成貝類はこの時点で全て失われるが、この部分の内容物については前述の最小フルイ目を用いた詳細分析サンプルで対応しようというものである。

市原市ではこれまで、大小含め数多くの貝塚調査がおこなわれ整理・報告がおこなわれてきた。後期前葉の亥の海道貝塚では土のう袋約4,000（フルイ上水洗後で400箱）の貝層サンプルを、後期前葉と後葉の能満上小貝塚では土のう袋約800（フルイ上水洗後で200箱）の貝層サン

プルを分析し報告書を刊行した。市原市を代表する大規模貝塚である祇園原貝塚では、5次にわたる発掘調査の間に採取されたテンバコ約3,000箱（フルイ上水洗後で1,650箱）におよぶ貝層サンプルを5年の歳月を要し分析し、1999年3月に報告書を刊行した。この貝塚では前述の調査方法を駆使し、動物遺存体に関する膨大なデータを集計し食生活の復元を可能にするとともに、約100点の貝製品と200点の骨角製品の検出に成功した（なお報告書刊行後、貝層サンプルに関するデータに遺漏があることが判明した。この場に改訂版を掲載し責を果たしたい。第2分冊555ページ第37表)。また平成9年度より、7次にわたる発掘調査の間に採取されたテンバコ約30,000箱におよぶ貝層サンプルを有する西広貝塚の整理作業がはじまり、前述の調査方法で連日貝層サンプル処理作業がおこなわれている。おそらく、これだけの貝層サンプルを分析できる貝塚は全国的にみても少ないだろうし、今後もまずあり得ないだろう。したがって、可能な限り様々な情報が抽出できるよう努力している。特に、大規模貝塚の形成過程、時期別さらに細かい区分での食生活の復元、微細な人工遺物データを加えたうえでの石器・土製品・骨角貝製品の内容など、この貝塚でしかできない点を明らかにしたい。貝製品について若干これまでの成果を述べると、今回述べてきた貝製装身具のほぼすべてが検出されており、特にこれまであまり一遺跡で多くみつかることのなかったタカラガイ類・イモガイ類の加工品が未製品を含め多量に検出されてきており、いわゆる「南海産貝類」を使った製品の貝素材の入手ルート・製作方法がおそらく解明できると期待している。まずは、筆者が現在調査中の房総半島・伊豆諸島の各海岸部での現生タカラガイ類・イモガイ類の打ち上げ標本の分析結果を明らかにした上で、西広貝塚の資料の蓄積を待って論じるつもりである。

（市原市　史跡上総国分尼寺跡展示館）

引用・参考文献

(1) 西村正衛・金子浩昌 1954 「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚(第二・三次調査)」『早稲田大学教育学部学術研究』3

(2) 岡村道雄 1985 「第Ⅱ章」『里浜貝塚Ⅳ』東北歴史資料館

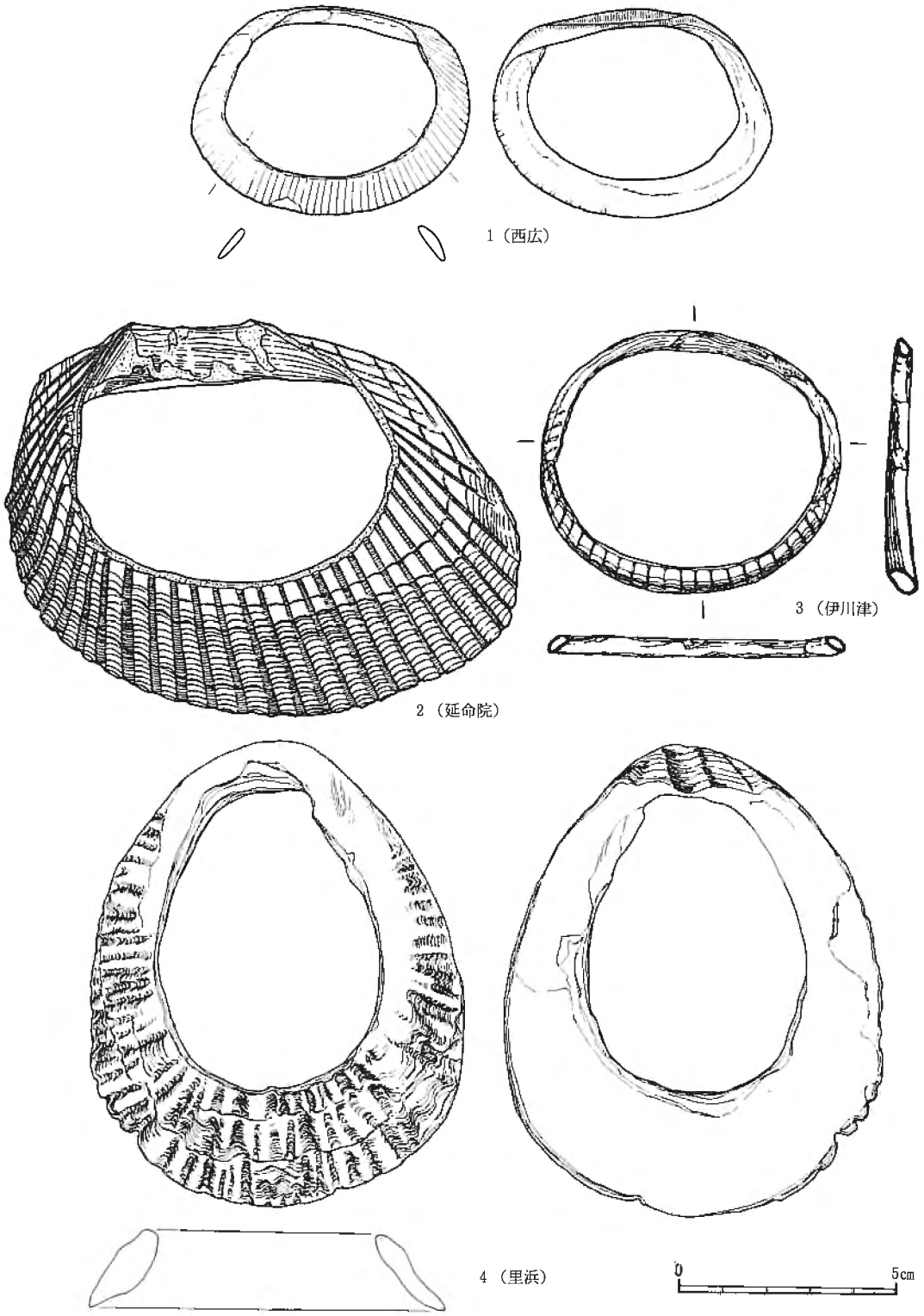
(3) 小笠原永隆 1998 「第4章　第5説3(2)磨貝」『千葉東南部ニュータウン19－千葉市有吉北貝塚1(旧石器・縄文時代)－』 財団法人千葉県文化財センター

(4) 今橋浩一 1980 「オオツタノハ製貝輪の特殊性について」『古代探叢』

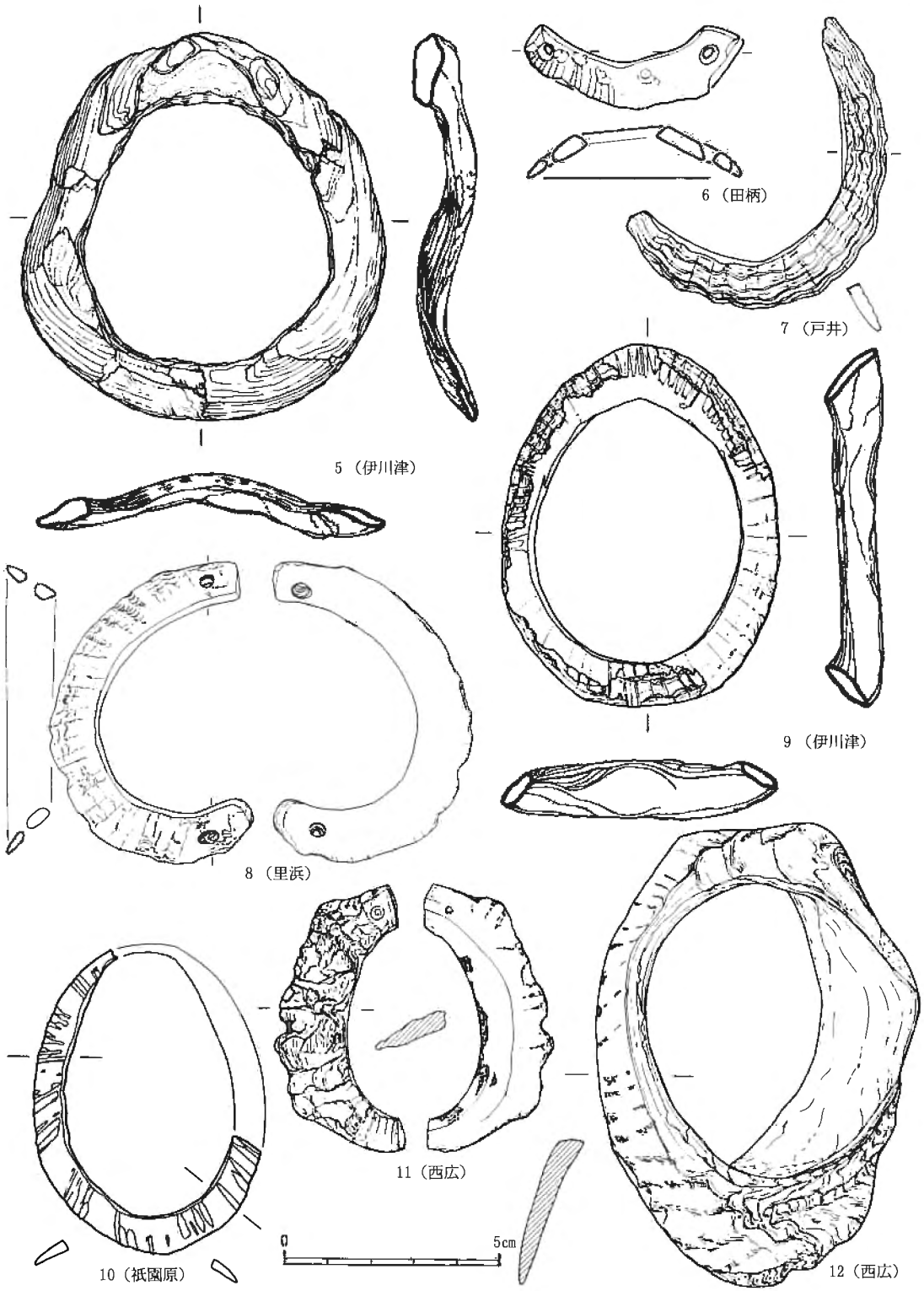
橋口尚武 1994 「東の貝の道－伊豆諸島から東日本へ－」『日本考古学協会第60回総会研究発表要旨』

山本愛三・草苅　正・金子浩昌 1995 「オオツタノハガイと考古学－オオツタノハガイの分類学的研究と関連する考古学的遺物の系統的研究－」『九州の貝』第43号

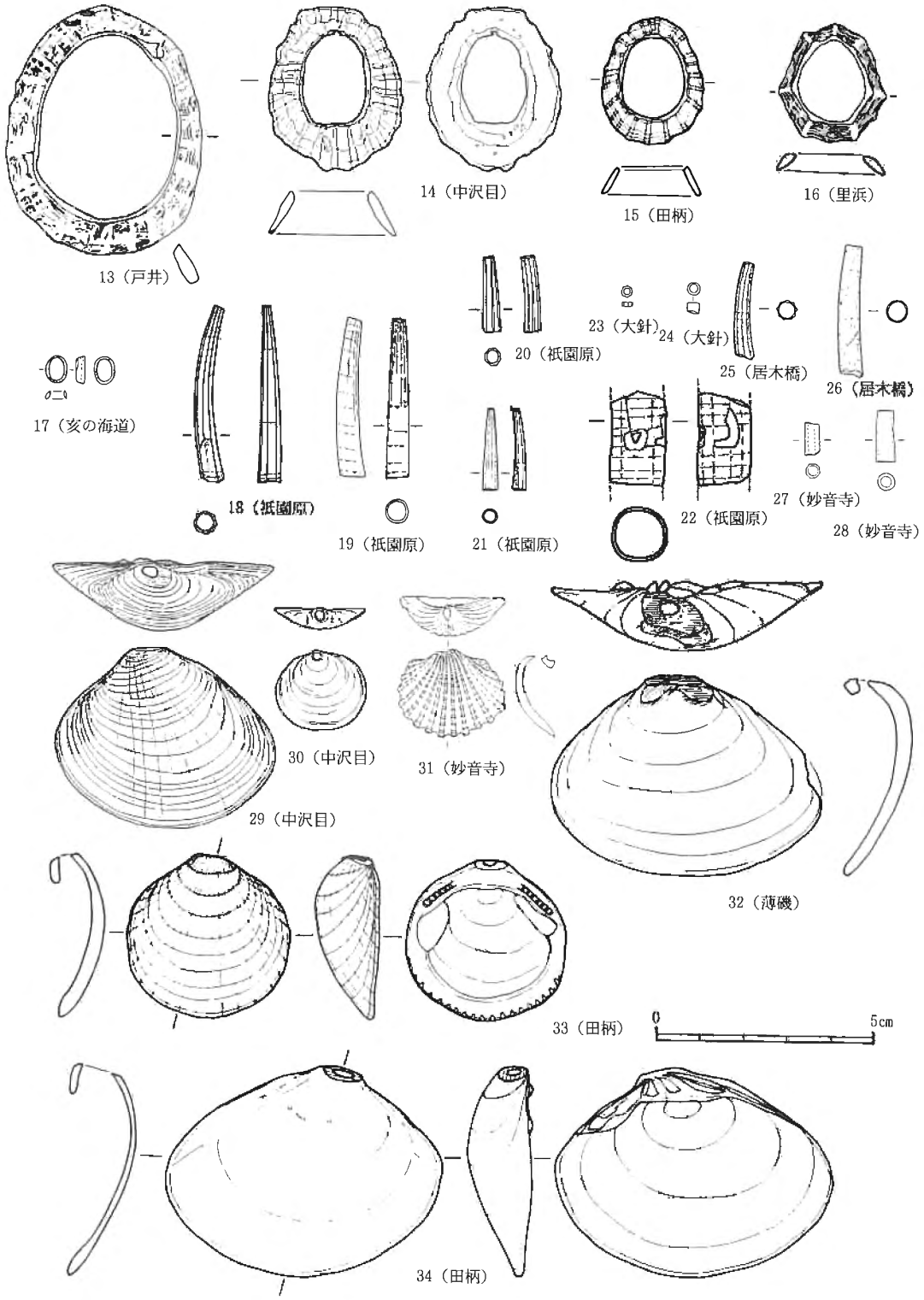
(5) 東北大学文学部考古学研究会 1995 「縄文時代晩期貝塚の研究 2 中沢目貝塚Ⅱ」
張替いづみ 1985 「原町西貝塚出土の動植物遺存体」『原町西貝塚発掘調査報告書』
古河市史資料第 9 集
佐藤孝雄・中村弘昌 1994 「骨・角・牙・貝製品」『上高津貝塚 A 地点』
取手市教育委員会 1995 「中妻貝塚」
(6) 白井祥平 1997 「貝Ⅱ」『ものと人間の文化史』83－Ⅱ 法政大学出版局
(7) 財団法人千葉県文化財センター西野雅人氏のご教示による。
(8) 山鹿貝塚調査団 1972 「山鹿貝塚」
北九州市立考古博物館 1994 「九州縄文時代の装身具」『九州の貝塚 第12回特別展』
(9) 加納 実 1998 「武士遺跡 2 」『財団法人千葉県文化財センター調査報告』第322集
(10) 平成11年度文部省科学研究費奨励研究 B にて、房総半島・三浦半島・伊豆諸島各海域の海岸部でのタカラガイ類・イモガイ類の死殻打ち上げ標本を採集・分析処理中である。
(11) 佐藤一夫 1993 「北海道における貝製平玉について」『吉崎昌一先生還暦記念論集 先史学と関連科学』
(12) 長谷部言人 1942 「石器時代のタカラガヒ加工」『人類学雑誌』第57巻第 9 号
(13) 忍澤成視 1993 「縄文時代後・晩期の装飾観念－市原市西広貝塚出土の骨角貝製装身具を中心として－」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』
(14) 市立市川考古博物館 1999 「向台貝塚資料図譜」『市立市川考古博物館研究調査報告第 7 冊』
(15) 佐藤一夫 1991 「タカラガイの道 ～タカラガイ製装身具についての一考察～」『苫小牧市博物館研究報告』第 1 号
(16) 近藤 敏 1987 「菊間手永遺跡」『財団法人市原市文化財センター調査報告書』第23集
(17) 鈴木 尚 1943 「二種の新貝器について」『人類学雑誌』58－ 8
(18) 北区教育委員会 1986 「北区西ヶ原貝塚」



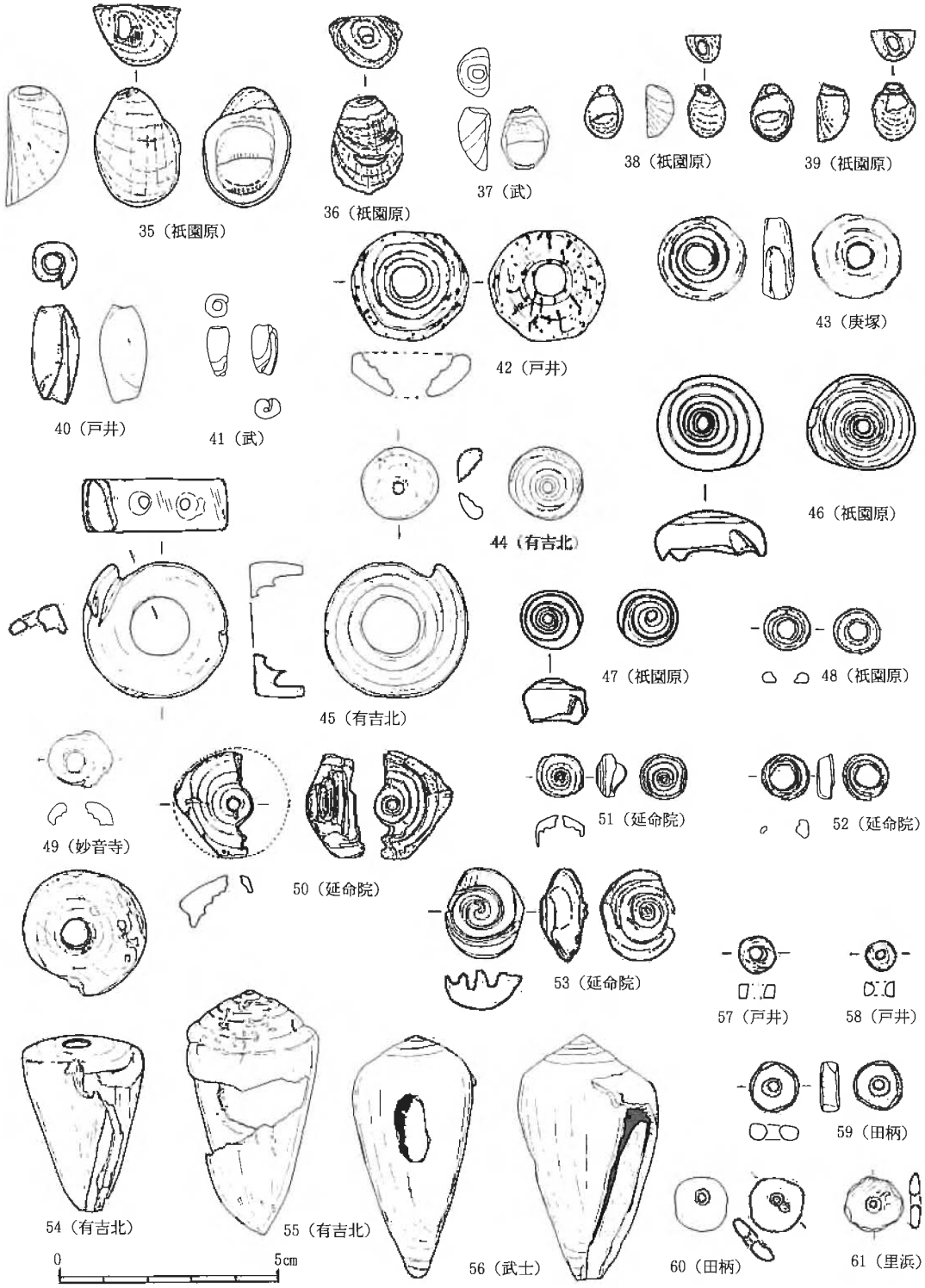
第１図　貝製装身具実測図１



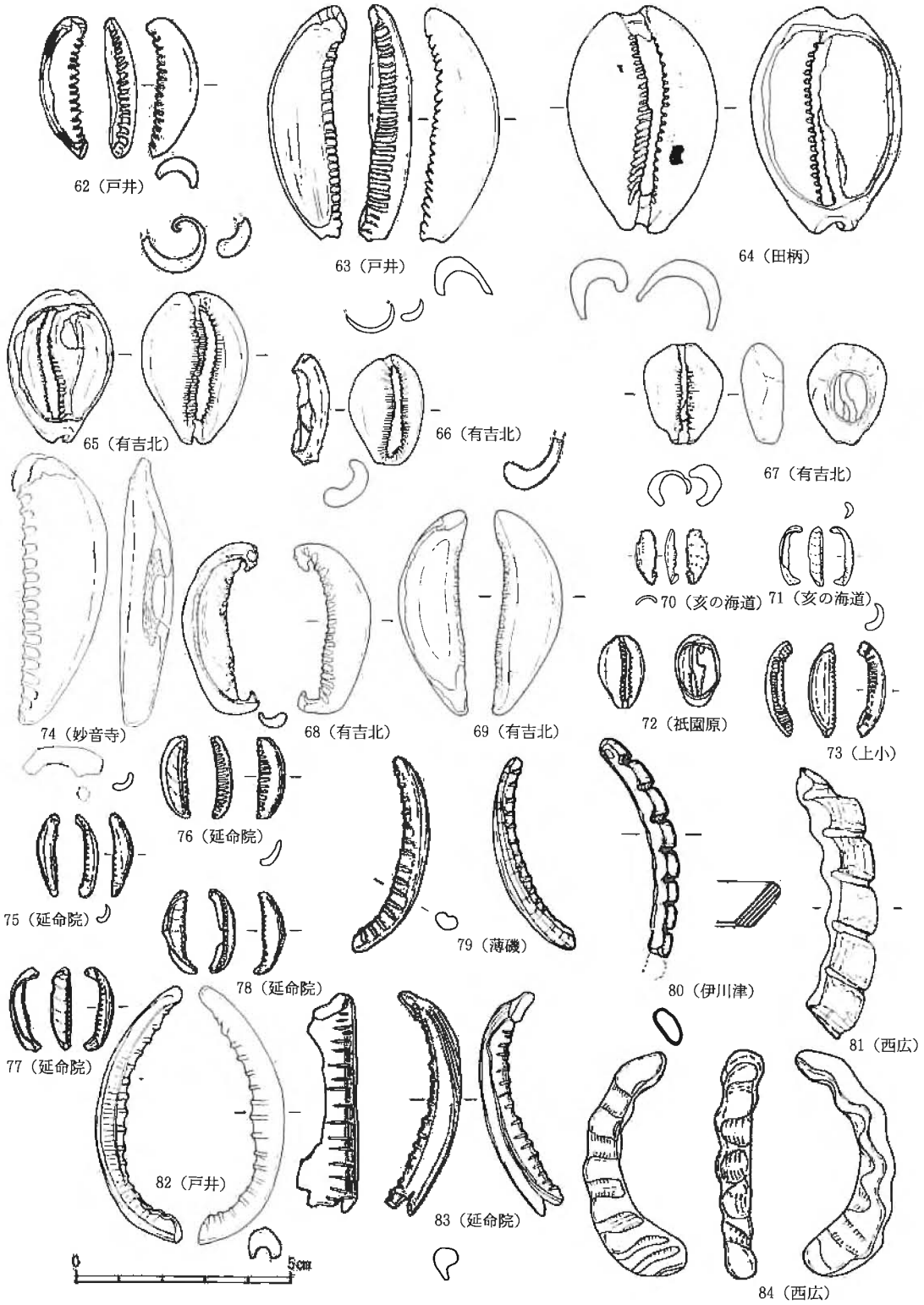
第２図　貝製装身具実測図２



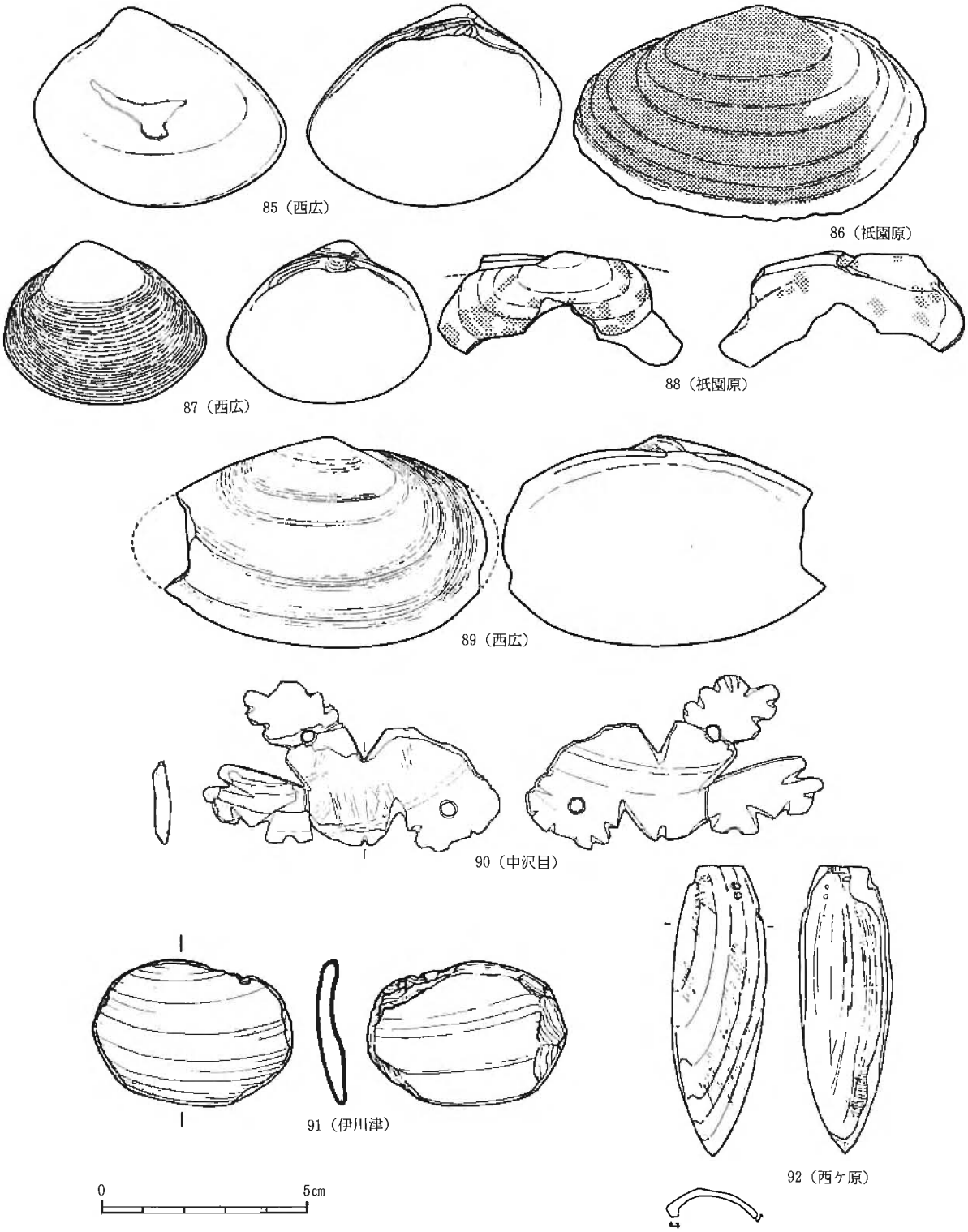
第３図　貝製装身具実測図３



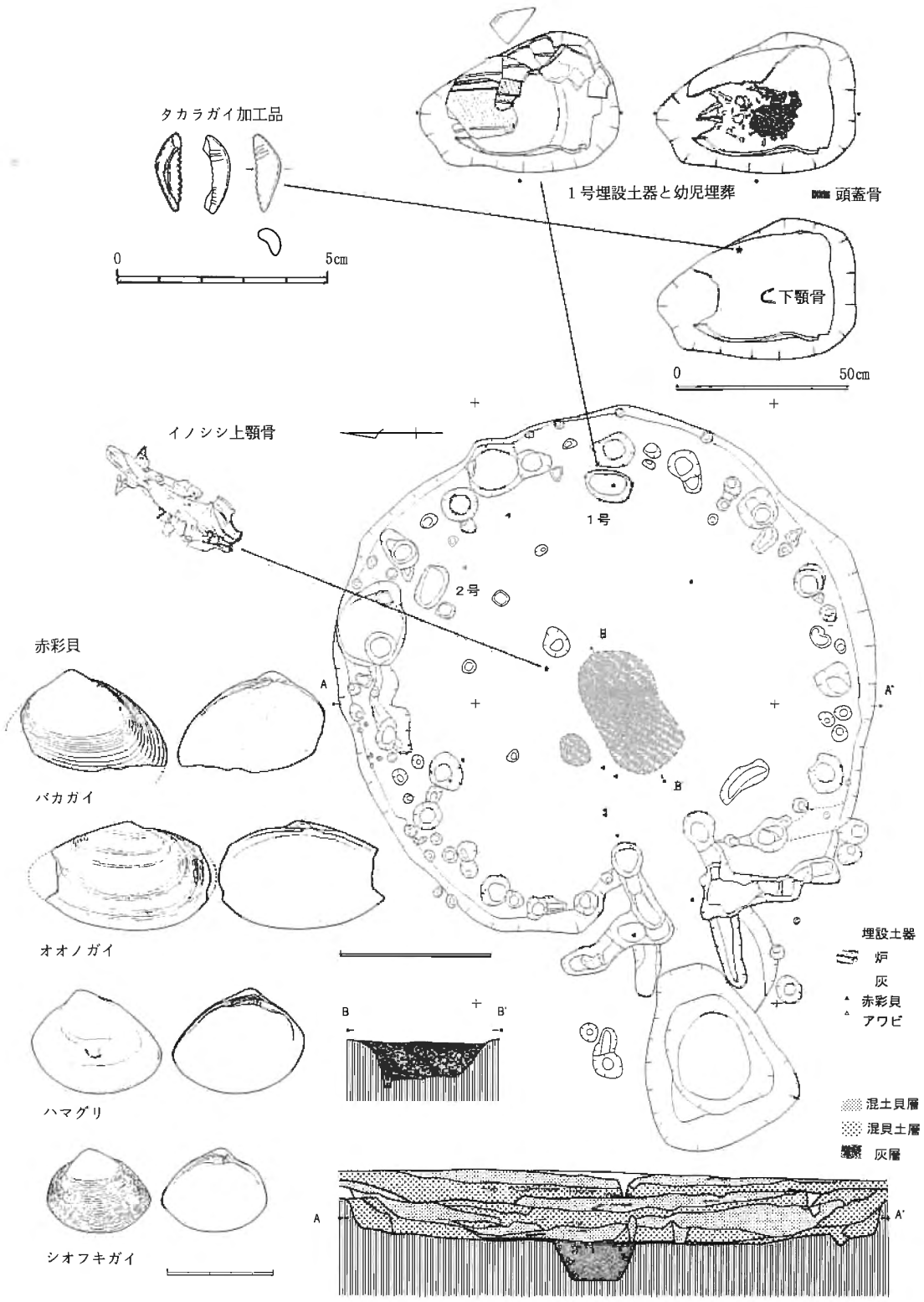
第4図　貝製装身具実測図4



第５図　貝製装身具実測図５



第６図　貝製装身具実測図６



第７図　西広貝塚住居内　タカラガイ加工品・赤彩貝出土状況

第１表　主要遺跡出土の貝製装身具の種類と数

No.	地区	遺跡名	時期	貝層規模	貝層サンプル処理方法	貝輪									小型貝輪（環状品）					
						サルボウガイ	アカガイ・サトウガイ	ベンケイガイ	(エゾ)タマキガイ	イタボガキ	オオツタノハガイ	アカニシ	その他	計	ユキノカサガイ	ベッコウカサガイ	ヒメコザラガイ	カサガイ類	ウノアシ	レイシ
1	北海道・八雲町	コタン温泉遺跡	後期	大規模貝塚	皆采サンプル処理			1						1						
2	北海道・戸井町	戸井貝塚	後期	大規模貝塚	皆采サンプル処理	9		68		5	1			83				7		
3	宮城県・田尻町	中沢目貝塚	晩期	大規模貝塚	皆采サンプル処理	1	9	5		2	1			18				1		
						4	94	5					1	104	2					
4	宮城県・鳴瀬町	里浜貝塚	晩期	大規模貝塚	皆采サンプル処理			1		6	5			12		1			1	1
5	宮城県・気仙沼市	田柄貝塚	後～晩期	大規模貝塚	皆采サンプル処理		62	37			1			100	10					
6	福島県・いわき市	薄磯貝塚	晩期	大規模貝塚	皆采サンプル処理		16	23	6	18		1	11＊	75						
7	茨城県・土浦市	上高津貝塚	後期	大規模貝塚	コラムサンプル処理		14	22						36						
8	茨城県・取手市	中妻貝塚	後期	大規模貝塚	コラムサンプル処理	10		13			1			24						
9	茨城県・古河市	原町西貝塚	前期	小規模貝塚	皆采サンプル処理															
10	埼玉県・伊奈町	大針貝塚	前期	小規模貝塚	皆采サンプル処理															
11	埼玉県・秩父郡	妙音寺洞穴	早～前期	—	皆采サンプル処理															
12	東京都・品川区	居木橋遺跡	前期	小規模貝塚	皆采サンプル処理															
13	東京都・荒川区	延命院貝塚	後期	大規模貝塚	皆采サンプル処理	1	1			1		1		4						
14	千葉県・千葉市	有吉北貝塚	中期	大規模貝塚	コラムサンプル処理	6				8	2	13		29						
15	千葉県・市川市	庚塚遺跡	前期	小規模貝塚	皆采サンプル処理	1	10		5	4		1		21						
16	千葉県・市川市	東新山遺跡	前期	小規模貝塚	皆采サンプル処理															
17	千葉県・市原市	亥の海道貝塚	後期	小規模貝塚	皆采サンプル処理	1		2						3			1			
18	千葉県・市原市	上小貝塚	後期	小規模貝塚	皆采サンプル処理	2								2						
19	千葉県・市原市	祇園原貝塚	後期	大規模貝塚	皆采サンプル処理	17		10			2	1		30						
20	千葉県・市原市	西広貝塚	後～晩期	大規模貝塚	皆采サンプル処理	45		28			1	8		82						
21	神奈川県・横浜市	茅ヶ崎貝塚	前期	小規模貝塚	コラムサンプル処理					1				1						
22	愛知県・渥美町	伊川津貝塚	晩期	大規模貝塚	コラムサンプル処理		39	39		89	7	3		178						
23	滋賀県・大津市	粟津湖底遺跡	前期	大規模貝塚	皆采サンプル処理					1				1						
24	鹿児島県・桜島町	武貝塚	後期	小規模貝塚	皆采サンプル処理	6								6						

＊フネガイ科1・ウバガイ2・チョウセンハマグリ1・トウカムリガイ科6・ボウシュウボラ1

第１表　つづき(1)

No.	遺跡名	管状垂飾				二枚貝穿孔品							巻貝穿孔品			巻貝 殻頂部		貝製平玉	その他
		ヤカドツノガイ	ツノガイ	マルツノガイ	ニシキツノガイ?	ハマグリ	チョウセンハマグリ	タマキガイ	エゾタマキガイ	ベンケイガイ	ハイガイ	イソシジミほか	アマオブネガイ	ヒロクチカノコガイ	マクラガイ	イモガイ類	その他		
1	コタン温泉遺跡																	2	
2	戸井貝塚		3												1	1		14(ヒノスガイなど)	
3	中沢目貝塚		1			6													
		1				9		1									1		ヌマガイ加工品6
4	里浜貝塚															1		1	
5	田柄貝塚	2	6			26			20	1								8(マガキ・ベンケイガイ)	
6	薄磯貝塚						3												
7	上高津貝塚	1														1			
8	中妻貝塚		1																
9	原町西貝塚		1																
10	大針貝塚	1	1																
11	妙音寺洞穴	11	107								1					2			
12	居木橋遺跡	5	13																
13	延命院貝塚		15													8	1		
14	有吉北貝塚		3											1		5			
15	庚塚遺跡		1													2			
16	東新山遺跡		4																
17	亥の海道貝塚		14																
18	上小貝塚	6	3																
19	祇園原貝塚	22	30	1									2	2		4			
20	西広貝塚	26	12																
21	茅ヶ崎貝塚		1																
22	伊川津貝塚																		
23	粟津湖底遺跡																		
24	武貝塚				1	1	1					2	1		1	1	9		

第1表　つづき(2)

No.	遺跡名	巻貝殻口部					赤彩貝								碁石形貝製品	備考
		ﾀｶﾗｶﾞｲ類	ｶｽﾞﾗｶﾞｲ	ﾄｳｶﾑﾘｶﾞｲ科	ﾔﾂｼﾛｶﾞｲ	その他	ﾊﾏｸﾞﾘ	ｼｵﾌｷ	ｵｵﾉｶﾞｲ	ﾊﾞｶｶﾞｲ	ﾑﾗｻｷｶﾞｲ	ｱﾘｿｶﾞｲ	ｱﾜﾋﾞ	不明		
1	コタン温泉遺跡															
2	戸井貝塚	2	16			ﾍﾞﾝｹｲｶﾞｲ加工品1										128点の貝製品のうち水洗選別作業中検出は60点
3	中沢目貝塚															
4	里浜貝塚															
5	田柄貝塚	1														
6	薄磯貝塚			2												
7	上高津貝塚	1														36点の貝製品のうち水洗選別作業中検出は12点
8	中妻貝塚													1		
9	原町西貝塚															
10	大針貝塚															
11	妙音寺洞穴	1														ほぼ全てが水洗選別作業中検出
12	居木橋遺跡															
13	延命院貝塚	5					6							1		
14	有吉北貝塚	7					2					1				ﾋﾛｸﾁｶﾉｺｶﾞｲ製品は未報告
15	庚塚遺跡															
16	東新山遺跡															
17	亥の海道貝塚	2						1								
18	上小貝塚	1														
19	祇園原貝塚	1					1		6		1					99点の貝製品のうち水洗選別作業中検出は73点
20	西広貝塚	3			1	カコボラ1	10	6	2	3			1	2		38点のツノガイ製品は全て水洗選別作業中検出
21	茅ヶ崎貝塚															未報告
22	伊川津貝塚				1										18	
23	粟津湖底遺跡	1														
24	武貝塚	1														

第２表　時期別集計表

No.	地　区	遺跡名	時期	時期区分	貝輪	小型貝輪	管状垂飾	二枚貝穿孔品	巻貝穿孔品	巻貝殻頂部	貝製平玉	その他	巻貝殻口部	赤彩貝	碁石形貝製品	計	文　献
11	埼玉県・秩父郡	妙音寺洞穴	早～前期	1			118	1		2			1			122	財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団「妙音寺／妙音寺洞穴」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第209集(1999)
9	茨城県・古河市	原町西貝塚	前期	2			1									1	古河市市史編さん委員会原始古代部会「原町西貝塚発掘調査報告書」(1985)
10	埼玉県・伊奈町	大針貝塚	前期	2			2									2	埼玉県立博物館「大針貝塚・浮谷貝塚」(1990)
12	東京都・品川区	居木橋遺跡	前期	2			18									18	品川区遺跡調査会「居木橋遺跡4（B地区）」(1992)
15	千葉県・市川市	庚塚遺跡	前期	2	21		1			2						24	市川市教育委員会「庚塚遺跡第5地点」(1997)
16	千葉県・市川市	東新山遺跡	前期	2			4									4	市川市教育委員会「東新山遺跡D地点」(1998)
21	神奈川県・横浜市	茅ヶ崎貝塚	前期	2	1		1									2	未報告
23	滋賀県・大津市	粟津湖底遺跡	前期	2	1								1			2	滋賀県教育委員会「粟津湖底遺跡第3貝塚」(1997)
14	千葉県・千葉市	有吉北貝塚	中期	3	29		3		1	5			7	3		48	財団法人千葉県文化財センター「千葉東南部ニュータウン19 −千葉市有吉北貝塚1（旧石器・縄文時代）−」(1998)
1	北海道・八雲町	コタン温泉遺跡	後期	4	1						2					3	北海道八雲町教育委員会「コタン温泉遺跡」(1992)
2	北海道・戸井町	戸井貝塚	後期	4	83	7	3		1	1	14		19			128	北海道亀田郡戸井町教育委員会「戸井貝塚Ⅲ」(1993)
7	茨城県・土浦市	上高津貝塚	後期	4	36		1			1			1			39	慶応義塾大学文学部 民族学・考古学研究室「上高津貝塚A地点」(1994)
8	茨城県・取手市	中妻貝塚	後期	4	24		1							1		26	取手市教育委員会「中妻貝塚」(1995)
13	東京都・荒川区	延命院貝塚	後期	4	4		15			9			5	7		40	東京都荒川区教育委員会「日暮里延命院貝塚」(1990)
17	千葉県・市原市	亥の海道貝塚	後期	4	3		14						2	1		20	財団法人市原市文化財センター「市原市山田橋亥の海道貝塚」(1992)
18	千葉県・市原市	上小貝塚	後期	4	2	1	3						1			7	財団法人市原市文化財センター「市原市能満上小貝塚」(1995)
19	千葉県・市原市	祇園原貝塚	後期	4	30		53		4	4			1	8		100	市原市教育委員会「祇園原貝塚」(1999)
24	鹿児島県・桜島町	武貝塚	後期	4	6		1	4	2	10			1			24	奈良大学文学部考古学研究室「鹿児島県桜島町武貝塚発掘調査報告書」『奈良大学考古学研究室調査報告書』第16集(1998)
5	宮城県・気仙沼市	田柄貝塚	後～晩期	5	100	3	8	47			8		1			167	宮城県教育委員会「田柄貝塚Ⅲ−骨角牙貝製品・自然遺物編」(1986)
20	千葉県・市原市	西広貝塚	後～晩期	5	82		38						5	24		149	忍澤成視「縄文時代後・晩期の装飾観念 —市原市西広貝塚出土の骨角貝製装身具を中心として—」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』(1993)
3	宮城県・田尻町	中沢目貝塚	晩期	6	122	1	2	16		1		6				148	東北大学文学部考古学研究会「中沢目貝塚」(1984) 東北大学文学部考古学研究会「中沢目貝塚Ⅱ」(1995)
4	宮城県・鳴瀬町	里浜貝塚	晩期	6	12	3				1	1					17	東北歴史資料館「里浜貝塚Ⅳ」(1985)
6	福島県・いわき市	薄磯貝塚	晩期	6	75	10		3					2			90	福島県いわき市教育委員会「薄磯貝塚」(1988)
22	愛知県・渥美町	伊川津貝塚	晩期	6	178										18	196	渥美町教育委員会「伊川津遺跡」(1988)

第37表　貝層サンプルリスト（改訂版）　　祇園原貝塚（本文編２）555ページ

資料No.	調査次	発掘調査時No.	遺構 No.	時 期	詳細分析サンプル数	サンプル採取基準	種 別	最大厚(cm)	フルイ水洗後残留物重量(g)	フルイ水洗後残留物総重量(g)	詳細分析率(%)
1	2	GN916	32号土坑	堀之内2	1	—	土坑覆土	—	1240	1240	100
2	2	GN912	34号土坑	加曽利B	3	層位	土坑覆土	90	5400	5400	100
3	2	GN157	1号住居		3	地点	住居柱穴	—	9075	9075	100
4	2	GN616・144	7号住居	堀之内1	2	地点	住居炉・出入口土坑	25	26542	26542	100
5	2	GN645	65号土坑	—	1	—	土坑覆土	55	2960	2960	100
6	2	GN617	72号土坑	堀之内2	1	—	土坑覆土	15	1154	1154	100
7	2	GN658	77号土坑	堀之内1	1	—	土坑覆土	25	13884	13884	100
8	2	GN653	80号土坑	堀之内1	1	—	土坑覆土	15	693	693	100
9	2	GN906	101号土坑	安行	10	層位	土坑覆土	85	10741	10741	100
10	2	GN951	103号土坑	堀之内1	4	層位	土坑覆土	80	7681	7681	100
11	2	GN822・148	19号住居	堀之内1	27	地点・層位	住居覆土	30	32779	32779	100
12	2	GN149	20号住居	堀之内1	1	—	住居覆土	25	1697	1697	100
13	2	GN907	107号土坑	堀之内1	3	層位	土坑覆土	40	1765	1765	100
14	2	GN910	108号土坑	堀之内1	4	層位	土坑覆土	20	3421	3421	100
15	2	GN821	—	加曽利B	9	地点・層位	包含層中	25	7494	7494	100
16	2	GN820	—	安行	26	地点・層位	包含層中	15	31089	31089	100
17	2	GN151	15号住居	堀之内1	1	—	住居覆土	10	3374	3374	100
18	1	GN418	116号土坑	堀之内1	10	層位	土坑覆土	150	79578	79578	100
19	1	GN508	178号土坑	堀之内1	1	—	土坑覆土	20	4315	4315	100
20	1	GN513 514・133	24号住居	称名寺	3	地点・層位	住　居出入口土坑	30	131700	131700	100
21	1	GN804	—	安行	44	地点・層位	包含層中	15	110866	110866	100
22	1	GN808	—	加曽利B	3	地点	包含層中	—	2373	2373	100
23	1	GN810・120	46号住居	安行	29	地点	住居覆土	45	131276	131276	100
24	1	GN806 807・113	50号住居	加曽利B	2	地点	住居覆土・柱穴	40	13918	13918	100
25	1	GN114	49B号住居	宮谷	1	—	住居覆土？	—	537	537	100
26	1	GN802	—	弥生	9	地点・層位	包含層中	15	10831	10831	100
27	1	GN803 ・106	—	堀之内1	28	地点	28号貝層？2次堆積	15	72971	72971	100
28	1	GN801 ・109B	55号遺構	堀之内1	41	地点・層位	種別不明遺構中	30	33078	33078	100
29	1・2	GN515	—	称名寺	6	層位	土坑覆土	30	101022	101022	100
30	1・2	GN517	—	堀之内1	4	層位	土坑覆土	60	59490	59490	100
31	1・2	GN518	—	称名寺	2	層位	土坑覆土	45	4258	4258	100
32	1・2	GN519	—	称名寺	8	層位	土坑覆土	70	4188	4188	100
33	1・2	GN520	—	称名寺	7	層位	土坑覆土	75	32299	32299	100
34	1・2	GN524	—	—	2	層位	土坑覆土	30	14700	14700	100
35	1・2	GN525	—	加曽利B	1	—	土坑覆土	20	3860	3860	100
36	1・2	GN526	—	加曽利B	1	—	土坑覆土	15	2600	2600	100
37	1・2	GN527	—	—	1	—	土坑覆土	30	4850	4850	100
38	4	307	—	—	1	—	土坑覆土	—	1695	1695	100
39	4	308	156号土坑	堀之内1	2	層位	土坑覆土	10	5125	5380	95.3
40	4	403	155号土坑	堀之内1	1	—	土坑覆土	25	15500	29930	51.8
41	4	404	158号土坑	称名寺	1	—	土坑覆土	—	29305	64665	45.0
42	4	330	—	—	1	—	包含層中	—	1200	1200	100
43	4	301	162号土坑	—	1	—	土坑覆土	25	1980	1980	100
44	4	402 ・101	27号住居	堀之内1	15	地点・層位	住居覆土	40	118419	794215	14.9
45	4	401	—	堀之内1	2	地点	包含層中	—	25645	43710	58.7
46	4	405	—	堀之内1	1	—	包含層中	—	6335	7890	80.3
47	4	406	177号土坑	堀之内1	1	—	土坑覆土	—	3525	7250	48.6
48	4	407	—	堀之内1	1	—	包含層中	—	6460	6460	100
49	3	J7	28号住居	加曽利B	1	—	住居炉	25	2330	2330	100
50	3	J23	29号住居	加曽利B	5	地点・層位	住居覆土	30	58140	205055	28.4
51	3	1号小竪穴	195号土坑	称名寺	2	層位	土坑覆土	50	2310	2310	100
52	3	J24	30号住居	加曽利B	1	—	住居覆土	—	14285	45770	31.2
53	3	53号小竪穴	210号土坑	堀之内1	1	—	土坑覆土	30	2170	4280	50.7
54	3	54号小竪穴	213号土坑	堀之内1	6	層位	土坑覆土	40	47955	150270	31.9
55	3	58号小竪穴	222号土坑	堀之内1	3	層位	土坑覆土	55	12895	12895	100
56	3	56号小竪穴	221号土坑	加曽利B	1	—	土坑覆土	—	4520	4520	100
57	3	J21	—	安行	1	—	包含層中	—	1135	1135	100
58	3	J6	—	安行	9	地点	包含層中	20	14685	52248	28.1
59	3	J15	32号住居	加曽利B	2	地点	住居覆土	—	5300	5300	100
60	3	J13	33号住居	加曽利B	1	—	住居覆土	20	300	300	100
61	3	51号小竪穴	235号土坑	称名寺	2	層位	土坑覆土	140	44115	179330	24.6
62	3	55号小竪穴	236号土坑	称名寺	2	層位	土坑覆土	50	15570	50365	30.9
63	3	J8	34号住居	加曽利B	4	地点	住居覆土	25	31495	64950	48.5
64	3	10号小竪穴	253号土坑	堀之内1	1	—	土坑覆土	130	31045	65250	47.6
65	3	J19	36号住居	加曽利B	1	—	住居覆土	—	9005	18165	49.6
66	3	J17	37号住居	加曽利B	1	—	住居炉	5	1565	1975	79.2
67	3	J11	38号住居	堀之内1	13	地点・層位	住居覆土	25	31695	99700	31.8
68	3	4号小竪穴	267号土坑	称名寺	1	—	土坑覆土	15	2455	2455	100
69	3	101号小竪穴	268号土坑	称名寺	1	—	土坑覆土	—	33770	33770	100
70	3	5号小竪穴	269号土坑	称名寺	1	—	土坑覆土	—	3535	3535	100
71	3	24号小竪穴	271号土坑	安行	1	—	土坑覆土	10	380	380	100
72	3	J3	42号住居	加曽利B	1	—	住居覆土？	—	330	330	100
73	3	J10	—	堀之内1	40	地点	包含層中	15	87950	242815	36.2
74	3	J5	45号住居	堀之内1	30	地点	住居覆土	40	100810	488615	20.6
75	3	J17	53号遺構	堀之内2	40	地点・層位	種別不明遺構中	45	82750	230690	35.9
76	3	J1	51号住居	加曽利B	29	地点・層位	住居覆土	25	164010	277540	59.1
77	3	J2	54号遺構	堀之内2	3	地点	種別不明遺構中	10	3355	3355	100
78	3	J27	—	—	1	—	—	—	1350	1350	100
79	3	59号小竪穴	—	堀之内1	1	—	—	—	3180	3180	100
							計		2008469	4197747	47.8